漢加斯底爾訳

修身口授

全

K110.1
53a

修身口授

漢加斯底爾譯

全

2/5
8
26

K110,1
53a

脩身口授

山梨縣藏版

[stamp]

小學脩身口授

漢加斯底爾　譯
那珂通高　訂

[stamp]

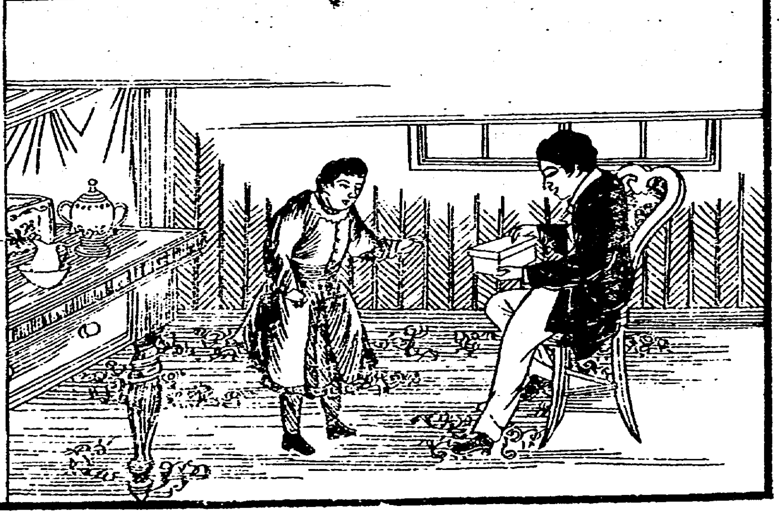
子羊の話

昔白く美しき母羊ありて、其の子を伴ひ牧場に草を食ひ居たり、子羊は、母の傍に遊び居けるが、遙に大木を見て、其邊に走り行くを、母はこれを喚び返せども、子羊は、歸る心なく、愈遠く放れ行きけるに、[illegible]林の中より、偸兒出來りて、直にこれを攫み去れり、母は益鳴き叫べども、子羊は、再其

の聲をきゝ、聞くことも能はざるに至れり、嗚呼、母も子も皆憫む可きことならずや、若し子羊として智あらしめば、初より母の側を離れざらまし、縦令ひ一回離るゝとも、其の呼ぶ聲に從ひ、速に歸りなば、かゝる偷兒の手には陷るまじきを、

果子の話

「ガストン」と云ふ稚き者あり、一日其の妹の「エミリー」と、榻の上に、美しき果子筥あるを見て、是は向キに、祖母の遺し置きたる筥ならん、此中には、いかなる物かある、汝はこれを見ることを願はずや、と云ふに、妹も開きて見んといへば、「ガストン」其の筥の蓋を取りて、是は圓き果子なり、食ひて見んと云ふ、妹はこれを留めて、必祖母に叱られんと云ふを、「ガストン」は、只一ツ食ひて見んとて、これを食ふに、味甚苦かりければ、此の果子は味苦か



らずと云ひけり、汝等ことを知るか、彼の「ガストン」は、其の笞に欺かれたるのみ、是は果子にはあらずして、丸薬なり

人漸ク貪吝となる事

衆多の小童、相集りて物語るに、其の中一人の云ふには、余は羽子の遊を好めば、「ボール」に胡鬼板を借りて楽まんと、思へども、昨日も縄を（是は縄を張り置き其の上を踰え遊ふものなり）だに、吝みて借さぬほどの者なれば、彼は必貸をすまじといへば「ギコスターウ」と云ふ者、傍より実に然り、彼は未ダ人に物を貸したることあらず、先頃も、我に一ッの竹馬を見せて、是は木曜日に、人より貰ひたりと云ひしが、甚ダ珍しき製りなるゆゑ、一時間、予に貸して騎らせよと、請ひしかども、彼肯かずして、其の儘秘め置けりと云へば、又「レヨン」といふ者、彼は毎に、遊具を人に貸せば、何時も毀はさるゝゆゑ、我は決して貸したることなしと云へり然らば、遊具は何の益に立つべきぞ、独のみ遊びて、何の楽しきことあらん、故に余は、彼の心を善しとは思はざるなりと云ふに、満座の小童、諸共に、尤なりと答へしかば、余

も作者いふ實に其の言を然りとせず、幼時より、已に一人の爲にのみする者は、年長くるに及びても、此の惡習止まずして竟に、貪吝の人となるものなり、

不謹愼なる兒童

「マリー」と云ふ小娘あり兄を「ハンリー」と云ふ、共に佳き別莊に住めり、其の莊外の小河に、板橋を架したり、其の母常に兄弟に誡めて、汝等園中に遊歩して、必橋の上には到るべからず、若誤らば、水中に陷るべき故、決して予が言を忘るゝこと勿れと云へり、他日「ハンリー」母の誡を忘れて、橋の上にて遊ばんとせるを妹は止めて母の教へめくる言あれば、行き給ふなと云ふに、「ハンリー」は、其の性傲謾なる者ゆゑ、妹の諫を聽かずして、獨り橋の上に遊びつゝ、「マリー」よ此處は甚面白し水面平にして、影を照すこと鏡よりも明なりといひ、興に乘じ、全身を照さんとして、身を傾けしが誤りて、忽水に陷りぬ、「マリー」は、大に驚き高聲に人の援を求むるに、幸此處を過ぐる人ありて「ハンリー」を、拯ひ出だし、衣服の濡れたるまゝ

母の處に伴ひ行きしより、若し此の時、此處を過ぐる人なかりせバ、「ハンリー」ハ必死を免れ得ずして、其の母及妹に歎きをかくるハ、何如許ならん、汝等、苟も親と師との、誡あるときハ、深く顧みずハあるべからず、是余の汝等が危難に罹らんことを恐れて、時々制する所なり、されバ能く愼みて必忘るゝこと勿れ、

爭鬪

「ボール」ハ、是ハ余が紙馬なりと云ひ、「オーギュル」ハ、否然らバ、是れ余がものなり、汝放さゞるかと、

互に罵り、此ハ彼の髪を攫み、彼ハ此の脚を握り、各力を極めて、一ッの紙馬を爭ふ中に、髪ハ亂れて面に蒙り、紙馬ハ中より割と破れて、二人共に左右に仆れ、後に在りし小兒に衝き抵りて、傷つくほどに、痛めたるうへに、破れし馬ハ、遂に誰の物

ともならざりき、

矜傲なる少年

「マルセル」といふものは、麗しき少年なれども、謾に大言して、何事をも知り顔にもてなし、僅に歴史を習ひ、文字を學び得れば、直にこれを人に誇れり、其の母時としてこれを誡むることあれば、其の教を拒みて、我もとくより、これを知れりといへり、汝等、必「マルセル」を友とすること勿れ、汝等は、物を識ること多からざれども、彼は、汝等よりも、更に物を知らざる者ぞ、されば、其の所作實に笑ふべきこと多し、汝等、決してこれに傚ふこと勿れ、

欺言を好む牧夫

「ミシエル」と云ふ牧夫ありけり、常に心を盡して、衆多の羊を牧せるが、其の場は、山林に近くして、狼多き所なりしに、「ミシエル」は、性質惡しき者にもあらず、又惰ることも無けれども、毎に、種々の詐を構へて、人を欺き笑ふことを、戯とせる癖ありき、一日、常の如く牧場に在りしが、徒然なりければ、又例の癖發りて、忽ち大聲に、狼出でたり、狼出でたりと

りと叫びし故、其の邊りに居合せし牧夫等、これを聞きて、急に一疋の犬を率ゐて、馳せ來りたれど援けんとするに、狼みえざりければ、惘れて、立居たる「ミシエル」は見て、大に笑ひ、余くそ即狼なれと云ふに、牧夫等、初めて欺かれたることを知り、皆怒りて歸り去れり、「ミシエル」は、これを見て欺き得しと欣び居たり、汝等も善く誡めよ、戯にも、人を欺くは、甚惡しきことぞ、假令詐を言はゞ、人皆これを疑ひて、終には、禍に罹るに至らんこの牧夫の如きも、果して、怨報を受けたり、其の

後、牧夫又例の如く羊を牧し居たるに、此度は、眞に狼出で來りて、衆多の羊の中より、最美しき羊を取らんとするゆゑ、狗を嗾して、これを防がしめ己も自噬み合へる狗を援けて、狼を打ち退け羊を免れしめんとすれども、一人の力の及ぶ所にあらざれば、又急に呼びて、狼出でたり、狼出でたりと、云ひしかども、他の牧夫等は、又例の許にとて、各自に其の羊を牧し、顧る者なき中に犬は竟に狼に噬み殺され、羊をも奪ひ去られたり、是より、牧夫大に悔いて、懲り懲み、敢て人を欺かざ

りしとぞ、是は常に詐を言へバ、偶實を説くと雖、人に信ぜられざることを、初めて悟り得られはなり、

清潔

温厚にして、勉勵なる童兒あり、余深くこれを愛せしと雖、其の兒に、又余が大に惡む一癖ありて、抱くことを得ず、是其の不潔なる故なり、この兒常に手は墨に穢れ、衣は垢に汚れ、手簿を破り、書籍を損じ、時ありては顔にも頸にも垢つきて髮は散り亂れ、其の醜きこと、實に視るに勝へず、余は、

此の兒若し能く己の穢きことは、母の愁ふる所なるを知らバ、終には自改むることもあらんかと、思へるゝなり、

食を貪る少年

汝輩小童、善く余が言を聽け、誰も卵糖(カステラ)及麵包(パン)類を好まざるもの無きゆゑ、汝等も、これを嗜むな

らん、是もとより、過には非ず、其の味美なればなり、余に「ジャク」といふ姪ありて、年尚稚きが、大にこれを好み、母より銭を納むべき嚢を、與へられしかば、其の中には、何時も一銭の貯あることなし、是は銭だにあれば、糕肆又は麵包店に行きて、費やすが故なり、その上己の貯少しと思ふ心より、買ひたる物を、他人に分つこともなく、人の眼を偸み、獨りしてこれを食ふ、實に野鄙なることにあらずや、汝等この際、途上にて、提琴を弾ずる小童を、見たるならん、彼の小童、一日路に泣き居

たり、是は飢に迫れるがゆへに、家に帰りても、主人に出さるべきものなきを、悲みてなり、其の時「ジャク」の朋友等は、汝歌わば銭を與へんとして、これに歌はせ、皆銭を出だして、與へたるに、獨「ジャク」のみは、例の如く、一銭をも持たざれば、何如に

ともすること能はず、是に至りて、始めて、自が平生食を貪りしことを悔いしより、是その性もとより、不善なる者に非ざるゆゑに、その食を貪れることの、恥づべきを知るのみならず、小童に、一錢も與ふることも能はざりしことを、憾めるあり、他日其の母、これを誡めて、時々糕糖類を買ふは、惡しきことには、非ざれども、必常に些少の錢をば、殘し置きて、乏しき者の、施しに備へよと、云ひ聞かせしかば、其の後は「ジャピ」能く母の誡に遵ひて、食を貪ることを愼めり、

忿怒

人ありて、ある家の内の騷がしきを聞きて、是は何事ぞと、窺ひ見しに、「アルマン」と云ふ一少年の怒れるありて、彼自が遊具を毀ち、凳子を覆へし、或は脚を以て榻を蹴倒し、泣き號びて、拳を揮ひ、齒をくひしばり、顔をも眼をも赫くして、髮を亂したる狀、惡むべくも亦怖るべし、何如になるかと見居たるに、其の母傍に來りてこれを慰め、抱きて鏡の前に到り、汝が狀を見よと、其の貌を照らし見せれば、「アルマン」は、我ながら、其の醜きを慙ぢ、直に

顔を背け、他人に見られんことを恐れたるにや、悄然として、坐を起ち、隅の方に退きけりとぞ、余希くハ、彼の児の、大に自悔い悟りて、この後ハ、能く過を改め、絶えて怒を發せざるに至らんことを、

老婆「イユロジール」の事

「イユロジール」といへる、一老婆あり、跛にして、行歩不自由なるうへに、其の家ハもとより貧しかれバ、寒き日にも、薪を焚きて、身を煖むることもなり難きゆゑに、林に入りて枯枝を拾ふにも、老いたれバ、甚困しみたれども、その業ハ、尤むる人もなきを以て、幸なりとして、日々出でゝ、枯枝を拾ひ居たり、一日、少年「ポール」、其の妹「ハンリーエット」共に林の間に遊び居たるが、彼の老婆、枯枝を束ね、これを脊負ひて、行かんとすれども、疲れ果てゝ、負ひかねたるを見て、此の兒等、その性善きものなれバ、己らの遊をバ、止めて、直に老婆の側に趨り行き、余等にも、その薪を脊負ふほどの力あれバ、二人にて代り見んと云ひながら、頻がて、その薪を負ひて、「イユロジール」の家に運びつかハしたり、「イ

ユロジールは二兒の優しき心に感じて汝等能く老人を敬まひ憫みて其の勞を助けたれば神明争でかこれを捨て給はん他日必大なる幸福を蒙らんと云ひしとぞ

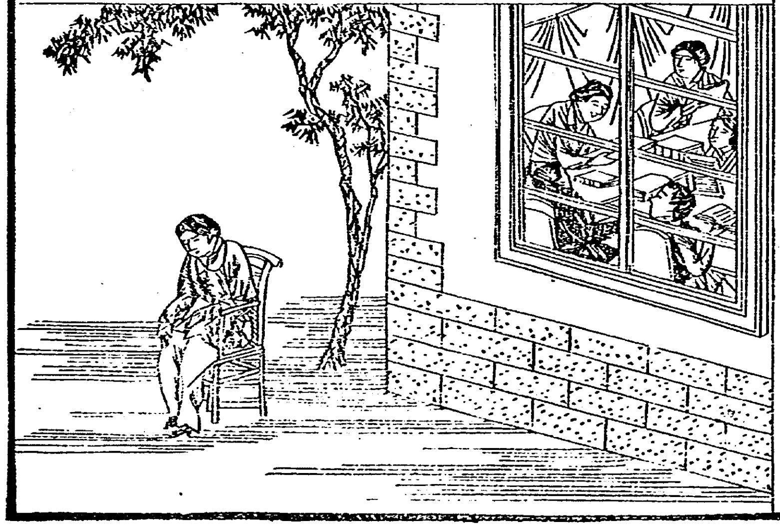
勞働遊戯

「ルウヰ」と云ふ者常に其の友に語りて余は甚勤勞することを嫌ふ若し毎日日曜日（日曜日は休業の日なり）にて學校へ行かず遊びなば何如許り樂しからんと云へり其の師「ハウヰ」の屢かく言ふを聞きてれに喩して人は先づ勤めて其の后に遊べば樂し亦深きものぞと云ふに「ルウヰ」は師の教を信せずして是は余を勤めさせんとの心より言ひさるものよと思ひ常の如く遊び居たりし一日師「ルウヰ」を呼びていふやう汝は憐むべき者かなもし余が言を信ぜずは汝自試に今日は汝に校に上らざることを許さん終日遊びて見よと許したれば「ルウヰ」は大に悦びて他の兒童等の上校する時に其の由を告げて諸共に遊ばんとするに鐘聲正に授業の期を促すによりて衆皆堂中に入りしかば獨「ルウヰ」のみ留れり是の時に至り

て「ルウ井」、果して何をか爲すや、跳り走れバ、須臾にして疲れ、彈珠ハジキ戯を爲して遊ばんとすれバ、伴侶無し、此回ハ「テマレ」の戯（此ハ、數條の線を、地上に引きて、先きなるものより、隻足を以て、跳り越え、預具ヘ置ける、石を蹴て、これを線に達せしむる、戯なり、）を試んとし、線を地上に引きて、石を置き、獨りにて、漸跳り行きけれども、僅に二回に至れバ、これにも倦きたり、是に於て、更に墨を把り、壁に畫きて、樂しむるに、其の畫ハ、家の内に掲ありて、其の前に、兒童の群り立てる、圖にして、即チその校堂のさまを、寫したる者なり、彼レ畫き畢り、其の圖を視て、熟く意ふに

ハ、繪をかくことの樂ハ、外の遊に勝りけれども、是ハ遊にハ非ズ、勤の一ツなり、是に由りて、顧みるに、遊戯の樂ハ、實に勤勞に如かざるものなりと、始めて悟り、遽に堂中に入りて、衆と同じく、其の業を勤めんとするの心ハ、出で來りたれども、今さら又入らんも羞かしく、鬱々として、獨リ凳子に腰を懸け、諸友の退くを、俟ち居たりしが、意を決して、午後にハ、必、衆と與に上校せんと思へるに、校中の生徒ハ、皆本課を了り、相共に、遊歩場に出でて、遊ぶを見れバ、何れも、己レの勤を盡しつるゆゑ、

大に樂しきさま見えて、跳り戲れ、笑ひ物語りして、遊び居たりしが、コルウヰも其の中に交りて、共に遊ばんと思ひたれども、今日の勤を闕きたれば、心自ら安からず、余は何とて今朝なども、此の人々と同じく、入校せざりけんと、快々として、樂まざりし



が、饑に叫びてすべての遊は、樂とするに足らねば、余は決して、これを好まずといふに、衆は皆、否々然らず、遊ほど樂しき者はなし、余等は、極めてこれを好むと云へり、既にして、午後に至れば、コルウヰは師の前に出でゝ、固く上校を許されんことを請ひ、心中には、少し余が課を勤むることを得ば、是實に大幸なりして、その樂、今朝休暇を賜はりし時よりも、倍るべしと、思ひ着きたり、遊戲は、以て勞苦を慰むる所にして、その樂の多少は、唯勤の淺深に關するものなり、

「アンドレ」の畜狗

少童「アンドレ」、或る日、父母に從ひて遊歩せしが、途中にして、悪しき小兒等相集り、小狗を河に投げ入れて殺さんとし、其の首を括り或は、棍を以て、之を打ち、或は、石を擲ちて、これを苦しましむるを見て、父母にその小狗を購はんことを、願ふに、父母も、善き人なれば、喜びて、小兒等を喩し、これを購ひて歸より、既にして月日の立つに隨ひ、その小狗、漸く長して、健かなる狀、實に愛すべくして、毎に「アンドレ」に伴ひ、右に馳せ、左に跳りて遊び戯れしが、一日「アンドレ」野に出でし、向方なる、池の畔に、白瑠璃艸の花の多く開きたるを見て、何花ならんと歩み近づきけるに、誤りて滑り顛びたれば、憐むべし、忽池の中に陷りて、溺れんとせしを、例の隨ひ來たる狗、水中に跳り入りて、小童の身に、傷つけざるやうに、その衣を啣みて、岸に拯ひ上げたり、夫、慈愛は、人の知らざる所に施しても、必その報あり、況や、その慈愛を施せる者を、伴ひたるに於てをや、

播種、及、刈收

小童ジュリアンと云ふもの、稍長ずるに及びて、父に從ひ、田野に行かんことを請ひ、共に出でし畠に抵れバ、父ハ、囊の中より、麥粒を取り出だしてこれを土に投げ散らせり、ジュリアンこれを見て大に驚き、父うへ、何を爲らるゝにや、余ハ、その麥にて手を觸までだに、母上ハ叱りて、人々の勤勞するハこれを得んが爲なるを、戲にも、かゝることするハ、宜しからぬ業ぞと、教へ給へり、若シ父うへの今日の所作を、知られなバ何如許か、歎き給ハん、余ハ、決して母上にハ、告げまじきゆゑ、か

ゝることハ、とく止め給ひてよと、云へバ、父ハ笑ひて、汝ハ、何事も母に隱さず、必顯に、これを告げよとて、彌、麥を投げ散らして、止まざりければ、ジュリアンハ、只驚き怪みて居たり、此の時にハ、漸寒天に向ひたる頃ゆゑ、復田野に行くことも、無かりしが、春になりて、偶、此處に來り見れバ、曩に投げ散らしたる麥、皆芽を生じて、青々としたり、他日又父母に伴ひて來り見るに、穫り入れ、近き時節なる故其の麥皆黄バみ熟せり、母ハ、ジュリアンに語りて、汝これを見ずや、初種を蒔きてより、漸根

を生じて又芽を出だし、月日經て、生長し、今かく黄ばみ熟するに至れり、後にハ獲りて、これを收め蓄ふるのミと、云ふに、「レユリアン」、始めて、父の麥を投げ散らせる、所以を會得し、心の中に、此より後ハ人に對して、妄に諫めがましきことをハ

言ふまじと誓ひたりしが、父又これに教へて、凡人ハ、苟も收め蓄へんことを、願はゞ、必先ッ種を下さんことを、要すべしと、云ひしとぞ、

林間に路を失へる兒童の事

爰に一兒あり、兄と共に、父母に從ひて、人里離れたる處に住めり、此の兒ハ、其の性、素より惡しき者にハ非ざるが、一日何事かハ知らねども、過チありければ、父ハ色を變じて、これを睨み、母も大に怒りて、これを叱り、兄ハ捨てゝ、外に出で去りぬ、此の兒稚心に、何如なれバ、親も兄も、余をバかく

棄つるならんと思ひ、泣き咽びて、居たりしが、暫
ありて、思ふやう、家の内には、余を愛する者、一人
も無ければ、余は、此より叱られざる、家に往かん
と、心着きたるに、其の悲しさ、益遣るかたなくて、
泣き居たれば、父は、田を耕さんとして、出で去り、母
は食を調ぜんがために、厨に入りぬ、時こそ好け
れと、竊に忍び出でたれども、さして適くべき方
もなく、又兄の目に、かゝらんことも、心苦しく、何
如にせましと、思ふほどに、向方に、大木のあるを
見て、獨語に彼の木の陰にて、其の實を食らひ、饑

を凌ぐに足りなんと、木陰に至りて、仰ぎ見れば、
葉のみにて、來れるかひもなきに、兄の來らんこ
とも、恐ろしければ、徑あるかたを尋ねて、立ち去
れり、此の兒、自其の罪あることを、知るが故に、再
父母に叱られんことを、畏れて心より、遠き路を
も、厭はなく、暗き所をも嫌はず日の暮るゝをも忘
れて脚に任せて歩み行きしが、遂に晩に向ひけ
れば、何となく、心細く、その邊を見回はすに、家一
軒もなく樹木森々として、彌闇く、寒さへ、添ひ來
て、その物凄きこと、言はんかたなし、是に於て、初

めて父母の懐かしき、兄のその身を尋ねんことを、想ひやり、頻に、家に歸らんとすれども、その路を失ひしかば、東にさまよひ、西に躊躇ひ、行くべき方を辨へず、この時、日は全く暮れて、一足も進み難きゆゑ、此の兒、大に泣き號びて、父を呼び、母を慕ひ、又兄の名を呼べども、唯梢を度る、風の音と、林に嘷る、狼の聲より外に答ふる者もあらざれば、愈恐れて歸らんとするに、愈迷ひて、道を失ひ、とある池の邊に出でしに、堤には、荊棘生ひ茂りて、岸には、蘆荻立ち蔽ひ、水の色さへ、見え分か

ば、いかにせましと、立ち留まれば堤の陰に小家ありて、壁の隙より、燈の影洩り出でしより、嬉しくも、住む人ありきと、立よりて、戸を叩けば、内より老たる翁、出で來たり、熟視れば、常に、此の兒の家に出入する、樵夫なり、樵夫も駭きて、その故を問ひ、松火を點し、慄き居たる、兒を慰めて、その家ま送り還さんと、立チ出でしが、行くこれに敎へて、汝もし、余が家に來らずば、憫れむも今宵一夜歸りかねて、饑ゑし、凍えもして親兄に如何許の、嘆きをかけんも、知るべからず、余、今汝を送り往かば、汝

縱令ひ父母に叱られ、打ち懲らさるゝとも、よからぬ心を生ずること勿れ、父母の心の、子を愛することは、少しも變らざるものなれば、叱るも、打つも、決して汝を棄つるには、あらずと云へり、

嫉妬

「エミニール」は、妬の心深し、是實に身の不幸と謂ふべし、彼は他人の、遊具を見る毎に、これを得んと思ふの心より、或は罵り、惑は怒り、何物にても、人の手に、在ることを快とせず、中にも最「ボール」の環を持ち、「ヨン」の獨樂を持てるを妬む、又「リヌエヤン」と云ふ者學校にて襃賜を得たりと聞けば例の妬の心より、大に泣き、「カストン」の、野遊びに行きて無花果を獲たるを見ては、これを怒り、又「ヴイクトル」と「フエリツクス」との、兩兒を怨むこと甚し、その故を尋ぬれば、小さき輕氣球のことに、由りてなり、即「ヴイクトル」をば、これを與へざりとて恨み、「フエリツクス」をば、これを貰ひたりとて、惡めるなり、かく、妬の心、甚しき為、人毎に、持てる物あれば、必分ち與ふれども、その心には、足れりとすることなし、されば此の兒の、好む人

もなく、亦此の兒を、好む人もなきゆゑ、その母、大にこれを歎げくり、噫「エミユール」、汝斯の悪習を、改むることなくハ、母ハ一生、悲に耐へざるべし、

鳥の巣を取りし少年の事

或者の物語りに、余稚き時、二人の兄と共に、鳥の巣を、取ることを好みたるが、余ハ、樹に登り得ざるゆゑ、樹の下に往きて、梢を窺ひ、其の巣あるを見れバ、兄を呼びて取らせしに、ある日、白頬鳥の巣を見出だしたり、いかにもして、その内を見んと思ひ、雌雄の親鳥の、飛び去るを俟ちて、兄等と

共に、これを取りて見れバ、二匹の雛鳥なり、余等を見て、嘴を開き、餌を求むる状なり、余ハ、丁寧に餌を與へて、畜ひおかバ、面白からんと言ふに、一人の兄ハ、然らバ、好き籠を買ひて、與へんといひ、又一人の兄ハ、その籠を、日のよく中る處に置き

て、囀らせんと云へり、余ハ最嬉しくて、その巣を
手に持ち立てるに、母鳥忽餌を啣みて飛歸り、巣
を求むれども、なかりければ、傍を飛び翔りて、巣
の有處を誤れるかと思ふ狀して、哀しげに、鳴く
こと甚し、父鳥ハ、遠くその聲を聞きて、同じく、此
處に飛び來り、雌雄共に、巣の跡を、飛廻りて、哀み
鳴くこと、稍久し、余その時親鳥どもハ、巣を取ら
れし故悲むならんといへバ、一人の兄も、心著き
て、親鳥ハ、かくまで雛を愛するものかと云ふに
又一人の兄ハ、然らバ、早くその巣を返さんと云

ひて、その巣を持ちて、立ちよれバ、雌雄ともに怕
れて、何處にか、飛び去りぬ、余等皆、後悔すれども
爲んかた無く、遂に謀りし如く、巣を持ちて、家に
歸り來きバ、母ハ、これを見て、さても、情け無きこ
とをせしものかな、汝等の遊ハ、このうへなき、惡
しき業なるぞと、誡められけりしが、翌日に至り、
餌を與へなどして、勞へれども、二匹ともに、そのま
まに死失せたり、實に、余等が意を用ゐるハ、母鳥
の、慈心に及バざることと、遠きを知りて、兄弟共に、
今より後ハ、決して、かくる遊ハ、なさまじと誓ひ

て、復その言には負かざりしと云へり、

花及蝶

小童ありて、母に從ひ、郊外に遊びしより、頃しも夏の央なりければ、麥も菜の花も、皆畠に滿ちて、その間に、種々の花薫り、數多の蝶、戲れ遊べり、小童は、麥の間を分け行きて、花を摘まんとするを、母は、留めて是は、麵包を製るに、用ゐるものなれバ、必踐み荒らすことなかれ、殊に花は莖に附きてあれバこそ、美しけれ、手に取るときは、萎むものぞと、云ひたれバ、教ふるやうに、花をバ摘まで、母の側を去りて、一匹の蝶を捕へて、持ち歸り、母君是は何と云ふ物ぞと、問ふに、母は、汝能く考へ見よ、それをぞ、動物と云ふ、今汝に撮まれ、翅を傷めて、飛び得ねば、憫むべきことならずやと、云へバ、小童聞きて、哀に思ひ、傷めし翅の、舊のまゝにならぬを、歎き居たり、凡田野は、皆神明の園なり、動物も、植物も、亦神明の、造りなせる物なれバ、余が必用のものは、取りても、妨なしと雖、己一人の娯に、神の物を、害ふは、實に良からぬことゝし、謂ふべし、

兒童神を拜するの禮

一人の母あり、その子に教へて、今汝ハ、年尚稚し、余も昔ハ、汝と同じく、稚かりしが、母ハ、誠に善き人にて、田舍に住めり、或日、余、田圃に出でゝ、其處此處と遊び歩行き、家に歸りて、母の膝を枕にし、寢ながら、母に語りて、今日ハ田圃に遊びて、甚樂しかりしといへバ、母ハ答へて、汝が樂しと思ふ、田圃ハさらなり、その處を照す太陽、又ハ汝が夜見る所の、月も星も、皆神明の、造り給へる物にして、稚き者に、善き母を得しむるも、亦神明の欲せる所なりと、教へ給へり、その後、余、又母に問ひて、

かく尊き神明の德に報い奉らざるハ、最畏し、如何にして、之を謝し奉る心を、神明の聽に達すべきしと云へバ、母又教へて、人の爲に、誠を盡し、神慮に副へて勤勞し、何事も、神の命に背くことを勿きを、神明を愛し敬ふ徴とすべし、されバ、常に低聲に、仰き告げ奉りて、その仁惠を忘るゝこと無きハ、是神明に、謝せる所なりと云へり、

小學脩身口授終

北爪有卿 畫

K110,1-59

定價五錢五厘

山梨縣藏版
明治九年六月刻成
發兌書林
甲府常盤町三十八番地
內藤傳右衛門